



TITLE:

アジア主義とアジア地域研究成立 への一視点

AUTHOR(S):

筒井, 清忠

CITATION:

筒井, 清忠. アジア主義とアジア地域研究成立への一視点. 重点領域研究総合的地域研究
成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求
めて 1996, 14: 1-14

ISSUE DATE:

1996-02-29

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187542>

RIGHT:

アジア主義とアジア地域研究成立への 一視点

筒井清忠

近代日本のアジア主義の研究は未だに極めて層の薄い状態にある。アジア地域研究の成立とアジアに対する特別の感情や「思い入れ」を抱いたアジア主義の思想との不可分性を思いあわすとこのことは憂うべき事態といわねばならないであろう。そこで本稿はアジア地域研究成立史の前進のためにあらためてアジア主義の意義と問題点について考察することにした。それがアジア地域研究成立にどのように結びつくのかは最後に考察することにして。

さてアジア主義についての乏しい研究史を振り返ってみると、明治期についてはそれでもある程度の蓄積があることに気づかされる。代表的なアジア主義の思想家というような人もほぼ定まっており、ある程度の筋はつかみうる状態になっている。ところが、大正・昭和前期になると、不明瞭のまま放置されているといってもよいような状態である。そもそも大正・昭和期の日本のアジア主義についての整理された研究書というものが存在しないのである。存在しない分は正確な事実に基づかない様々な「史観」が適当に補っているというのが実状といってよいだろう。そこで本稿は、太平洋戦争の敗北に至る最も重要な歴史のコースとしてのその大正・昭和前期のアジア主義に主に焦点をしばって検討してみたい。

まず「対象の分類」に入ろう。

アジア主義というものを検討する場合、さしあたり次の3つぐらいの区別が必要と思われる。一つは思想家すなわち思索しその言説を表に出すという形でアジア主義にかかわる人々である。実務家や、一般の人々の世論も自分たちの気持ちをうまく代弁してくれる存在としての思想家や言説家というものを頼りにする以上、思想家はやはり最も重要な存在であるといえよう。

しかし、2番目に、実務家すなわち実際にアジアとかかわる人々がどのような考えを持っ

ていたのかということも重要である。ところが、こちらのほうは研究史上ではあまり扱われない。というのは、実務家の思想は思想家に比べてより研究しにくいからである。それは書物というような形で全面的に述べられているわけではないので不明瞭であるし、原則に生きているわけではないという点で態度が変化しやすい。従って取り扱いにくいわけである。政治的影響力という視点で、近代日本のアジア主義を考えるに当たっては、実は重要なのは、これらの実際にかかわりをもった人々の方なのだが、十分まとまった研究がないのはこうした事情によるものと思われる。

政治家では「英米本位の平和主義を排す」というような主張をした近衛文麿や、犬養毅のように辛亥革命にかかわった人などが代表的な事例といえよう。

また官僚も重要だが、これもいろいろな省庁がある。外務省は最も重要だが、外務省の主要な外交官の中に、どのような形で英米派がおり、アジア派がいたのかということについて、明治以降昭和の前期まで一貫してフォローした研究というものも存在してはいないようだ。何度か外務大臣をやった内田康哉のようにワシントン体制づくりなどに努力したから英米派かということ、実は若いときから強力なアジア主義者の面をもっており、「日清韓三郎」というペンネームで、いかにアジアを欧米から防衛していかなければならないのかというようなことを書いているのである。このような複雑な多角性もアジア主義研究では配慮しなければならないであろう。

軍人についても、松井石根などアジア派の軍人の系譜を見ていく必要があるだろう。財界人についても住友の小倉正恒のような「漢学趣味」人の系譜などがあり、ここには実に広大な研究領域が開けていることがわかる。

3番目が世論・社会意識の問題である。特に普通選挙制度ができ、新聞の発行部数が伸び、ラジオの放送が始まってからの世論は、非常に重要である。これまでの研究では割合簡単に「世論が反米的になった」とか、「世論が盛り上がった」というようなことが書いてあるのだが、何を根拠に「盛り上がった」とか「盛り上がらなかった」といっているのか、かなり曖昧なままのように思われる。ある事件が起きたときに「国民がアジア主義的な方向に行ったのか行かなかったのか」についてもっと徹底した研究が必要であろう。

太平洋戦争へ進んでいくプロセスにおいては、『少年倶楽部』などの雑誌や映画などの大衆文化が全体として大東亜共栄圏的方向へ進んでいくのにどのくらいの役割をはたしたのかについての研究もまだ非常に不十分であって残されているということが指摘されよう。

最近『帝国の銀幕』という昭和初期の日本の映画を系統的に研究したアメリカ人の研究

が出たが、この研究によると、日本は主に満州事変期から日中戦争にかけて、「アジア、アジア」といったのだが、実はほとんど関心は、中国、「満州」、蒙古といったところにあった。太平洋戦争が始まってから、南方に出ていき、にわか南方と日本の連帯を説いた映画が出てくるけれども、それはほとんど数年間で、あっという間に終わってしまい、大部分の日本人の意識にとっては、「アジア、アジア」といっても、実は東南アジアのことは意識の上ではかなり乏しかった。映画で見る限り、「アジア」とはほとんど中国大陆のことだったということが述べられているが、こうした研究は大衆の社会意識を知るためには欠かせないジャンルといえよう。

これが次の“対象地域”という問題につながっていくことになる。

アジア主義ということが言われる場合、どのような地域のことなのかということについて、実はかなり差がある。上述のようにアジア主義者といっても、中国とその近くの当時の「満州」、蒙古というものをアジアとして考えているものが非常に多い。東南アジアに大きなウェイトを置いて見ている人は意外に少ないと言えよう。まして、世論や社会意識に関しては東南アジアへの関心は非常に稀薄で大多数の日本人にとっては、太平洋戦争が始まってから初めて意識に上ってきたと言ってもいいのではないかと思われる。

また、日本のアジア主義思想においては、インドの占める位置が特異に大きいということが特色としていえるのではないか。これは、仏教の影響ということもあるが、日本のアジア主義思想の流れが岡倉天心に始まるもので、天心とインドの関係がその後までかなり受け継がれたことによるものと思われる。このように、アジア主義といっても、思想家の場合、とくにどこを対象地域として考えているか、あるいは世論がどこを見ているかという問題も曖昧なままだと言えよう。研究上の基本的な問題点は以上のように整理できるように思われる。

さて、思想家・実務家・世論と三つに分けたうち、本来はこの全部が取り扱われるべきなのであるが、非常に研究が遅れている中で、思想家の影響力はやはり最も強いので、ここでは思想家を主に検討することにしたい。明治期については、前述のようにある程度スタンダードがあるので、前おきとして簡単に済ませて、大正・昭和期の代表的な思想家に主に焦点をしばって検討していくことにしよう。

明治のアジア主義は、樽井藤吉の『大東合邦論』から始まる。これは、日韓清、日本と朝鮮と中国の3つの国が一緒になって一つの国をつくり、その黄色人種の同盟によって、白人のアジア支配に対抗していこうということを、最初に本格的に述べた書物として、古

典型的な書物・先駆的な書物といってよいだろう。さしあたり日本と朝鮮が平等な立場で同じ国をつくろうと樽井は主張した。その後で中国を加えようというわけである。

この本は日本国内よりもむしろ中国や朝鮮で反響を呼んだと言われている。明治の終わりに韓国合邦がおこなわれるが、そのとき朝鮮の側から積極的に日本と韓国を合邦しようということを試みた李容九という人物は、樽井藤吉の影響を強く受けていたと言われている。いうまでもなく結果は平等な立場の合邦ではなかったから李はいわば裏切られたわけであった。

しかし、後のアジア主義の展開との関連という点で言うと、最も重要なのは、やはり岡倉天心のアジア主義だといえよう。その著『東洋の理想』（明治36年）はあまりにも有名なので今さら説明するまでもないかもしれないが、もともと英語で書かれた書物であり、「アジアは一つ」ということをはじめて本格的に論じた書物である。実は内容的には全体としては美術史的話題が多い。天心はさらにインドを旅行して、『東洋の覚醒』という書物も書いているのだが、これは内容があまりに激烈だったため、当時は発表されずに、昭和10年代のある種のアジア主義出版ブームになってから初めて出版されることとなっている。

岡倉天心のアジア主義は、アジアの精神文明を非常に重要視していることが重要であり、それ以前に何らかの形でアジアとの連帯を説いた人々は、初期の福沢諭吉にしろ樽井藤吉にしろ皆、“西洋文明は優れていて、その優れた西洋文明がアジアにはまだ広まっておらず、日本だけがそれを取り入れて成長している。だから、その日本が優れた西洋文明をアジアに持ち込んで、アジアを近代化させていこう”というロジックになっていたのに対して、天心はその逆で、“西洋の機械主義文明や科学文明などは間違っていて、東洋に精神的に意味のある優れた伝統的な文化や文明が残っている”と主張したのだった。その点でそれまでの議論とは大きく異なった構成になっている。それまでの議論は、かりに東洋対西洋、文明と野蛮という対抗ロジックを考えると、西洋が文明で、東洋が野蛮だと設定していたのだが、天心はその軸を逆転させたわけである。その意味で西洋近代主義文明批判の思想家として、ヨーロッパではウィリアム・モリスのような思想家に擬せられたりもしている。つまり、産業主義の批判であり、科学文明の批判者だという感じで受け止められていたのである。この点で天心の思想は画期的なものだといわねばならないであろう。

“インドに始まった文明も、中国の優れた文明もいずれも日本に到来した。そしてすでにインドや中国にも残ってない秀れたもの、すなわち偉大な東洋の文明の遺産は日本にあ

る。正倉院を見よ”というようなレトリックは、のちのほとんどのアジア主義の思想家によって使われることになる。“東洋文明の精髓は日本の文化にある”というのが天心の最も中心的な見解であった。

また天心自身インドに行き、タゴールなどと接触を持ち、インドの独立運動が弾圧されていることに非常に憤慨して、日本はもっと協力しなければいけないと主張していた点も見落とせない。天心は“西洋の近代文明の軍隊には簡単に勝てない。ゲリラ戦が唯一アジア人にとって有効な手段だ”というようなことを言っている。前述のようにこのような天心のインドとの特別な親近感は後の日本のアジア主義に大きな影響を与えたのであった。

以上が明治期のアジア主義についての概説である。

次に、本題である天心が亡くなった後の、大正から昭和にかけてのアジア主義について検討していくことにしよう。昭和十年代になると、日中戦争から太平洋戦争へのプロセスの中で、アジアにかかわる本が大量に出ているのだが、「時局便乗出版」が多く、思想的に意味のあるものはほとんどない。大正期のアジア主義者が説いていたものの繰り返しのようなものが多いのである。大川周明、北一輝、石原莞爾らの主張を焼き直しにしていたのが昭和十年代だったといってもよいかもしれない。その意味で、この三人はいずれも重要なのだがここでは大正・昭和前期に変わらず影響力をもち続けた人として大川周明について検討してみることにしたい。

まず最初にその生涯を振り返ってみることにしよう。

大川は明治19年(1886年)山形県庄内藩の医者之家に生まれた。

日露戦争が始まった年に、熊本の第五高等学校に入学。「黒潮会」という社会主義思想を研究する研究会を作っている。幸徳秋水・安部磯雄などの社会主義思想の影響をかなりの程度受けた。

その次の年に、五高「栗野事件」という著名なストライキ事件に際して学生の代表として活躍。雑誌に名前が出るなどする。

明治40年(1907年)に、五高を出て、東大の文科大学に入学。できたばかりの宗教学を専攻した。そして、学生時代に、岡倉天心の「泰東巧芸史」という美術史の講義を受けており、岡倉天心の直接の生徒ということになる。大川のアジア主義においてインドの重要性が非常に高い原因の一つもここにあったと考えることができよう。

明治44年、東京帝国大学を「竜樹菩薩論」を書いて卒業。中学の教師をしながら、このころ日本ではまだあまりやられていない回教(イスラム教)の研究にも手をつけ始めた

ころ人生の転機が訪れた。大正2年（1913年）に神田の古本屋で偶然サー・ヘンリー・コットンの『New India, or India in Transtion』という本を見、「この時初めて私は英国治下のインドの悲惨を見た。私は現実の印度に開眼して、それが私の脳裡に描かれた印度と、余りに天地懸隔せるに驚き、悲しみ、且憤った。」（自伝『安楽の門』による）。

“深遠な印度思想の研究に専心していて、現実のインドについてはほとんど知らなかったのだが、実は英国の植民地になって大変苦しんでいることをこの本ではじめて知る”というドラマティックな出来事に遭遇したのである。こうして近代インド研究さらには広くヨーロッパの植民地の支配の研究という方向に進んでいくことになる。

大正4年（1915年）、「初秋の美しく晴れた或日の午後のことである。私が帝大の図書館を出て、構内を赤門の方へ歩いて居ると、1人の印度人がつかつかと歩み寄って、英語で『貴下は日本人ですか』と訊ねた。」亡命インドの革命結社の黨員であったグプタが、大川がインドに対して興味を持って、インド独立運動を支援する気持ちがあるということを知って接近してきたのだった。こうして日本にいたインドの独立運動の志士たちと交わることとなる。大正5年（1916年）には、「現代インドの政治的実情を日本に紹介せる最初のもの」という形で、『印度に於ける国民的運動の現状及び其の由来』を著す。インドの革命運動家たちが日本国内で活動していることに対して、イギリス政府から苦情が来、日本政府は彼らを国外退去させようとしたため、大川はそれをかくまうなどの危険な活動をするようになる。そして大正7年（1918年）の「老社会」、さらに8年の「猶存社」の結成により、本格的にアジア主義の運動に乗り出す。

「猶存社」の出した機関誌『雄叫』に載った声明文を見ると「猶存社」に拠っていたアジア主義者たちの思想を理解することができるが、この文章ではアジアとしてかなり広い地域を考えていたことがわかる。「我が神の吾々に指す所は支那に在る、印度に在る、支那と印度と豪州の円心に当る案南、縮甸、暹羅に在る。チグリス・ユーフラテス河の平野を流るゝ所、ナイル河の海に注ぐ所、即ち黄白人種の接壤する所に在る。人類最古の歴史の書かれたる所は、吾々日本民族に依りて人類最新の歴史の書かるゝ所で無いか。吾々は全日本民族を挙げて亜細亜九億民の奴隷の為に一大リンコルンたらしめなければならぬ。」こうして、メンバーの一人であった中谷武世などは、“日本ではほとんどアラビア研究などだれもやってないし、またアラビアとの関係も全然ついてないからおまえやれ”というような形で戦後に至るまでの特別の中近東との関係が生じることになったのだった。

そして、中国にいた北一輝への帰国加盟勧誘には大川が直接携わったのであった。さら

に、大正の中期から終わり頃にかけては、このように結社で運動しているのと同時に、徐々に陸軍の軍人と接触するようになり、板垣征四郎や河本大作などの中堅の幕僚層と知り合いになっていった。

そして、昭和5年（1930年）に、橋本欣五郎大佐が「桜会」という結社を結成すると大川はその思想的ブレンに近い存在となる。この「桜会」が昭和6年に「三月事件」と「十月事件」というクーデターを企画。さらに「桜会」のクーデター事件と密接な関係を持っていた石原莞爾が満州事変を起こす。大川はこれらに何らかの形で関与しており、とくに「三月事件」は宇垣陸相のひき出しをはかるなど実際的中心人物であった。そしてさらに昭和7年には、5・15事件に加担し、検挙される。

要するに、大川の論理からすると、“日本はアジア解放の尖兵として実力行動をやらなければいけないのだが、そのためには、まず日本国内をその方向に向けて改造しなければいけない。それも実力行動でやる”ということになってくる。それで次々とこのような事件を引き起こしていったのだった。

その後、昭和12年（1937年）には日中戦争が始まるが、日中戦争そのものには賛成ではなかった。従ってこれ以後は日本のアジア政策にかかわる人材の養成と研究に主に携わっていくことになる。この点については後述しよう。もっとも、著書がベストセラーになるなどして、大川の名前は全体としては広まっていくこととなった。

昭和15年ごろには、東条英機とは決定的に仲違いするという状況で、日米戦争に関しては積極的に開戦回避活動をしている。しかし、戦争が始まってからは、ラジオ放送で米英のアジア支配の歴史を話し、それを昭和17年（1942年）に、『米英東亜侵略史』（第一書房）として刊行した。昭和20年の敗戦と同時に、日本のアジア侵略思想の最大のイデオログとされ、アメリカ軍につかまりA級戦犯となった。裁判中に精神病になったとして松沢病院に入り『古蘭』を翻訳している。

次に大川の思想を見ていくことにしよう。前述のようにある意味では「恩師」であった岡倉天心の思想を受け継いでいることが重要な特色といえよう。例えば“アジアの本質には「霊的存在」があり、その点で西洋とは異なる”といった発想はその典型である。結論を先取りして述べていくと、一方では“日本にアジア解放の使命がある”という発想、他方では“満蒙に日本の権益がある。これは日本民族としては当然守っていくべきだ”という発想、この二つの考え方が大川の内部でたえずないまぜになっていたように思われる。初期の段階は、どちらかというと理想主義的な、アジアと連帯して解放していくという考

え方が強かったのだが、大正の後期になるに従って、急速に満蒙問題というものが正面に出てきて、“權益を守る”という方向が強くなっていき、満州事変期になると、完全にその方向に転じたという風にまとめることができるであろう。

代表的な言説を見てみよう。

「吾等の信ずる所を以てすれば帝国は新しき世界の指導者たるの大命を上天より任課して居る。吾等は或人々の夢想せる如く日本の世界制服を主張するものでない。或は亜細亜統一を主張するものでもない。かくの如きは西欧民族の誤りを繰返すものに過ぎぬ。吾等の任務は西欧民族に虐げられつゝある国民を救済することで、決して西欧民族に代つて彼等を虐げることではない。吾等は総ての民をして人類に賦与せられたる最も貴き権利の一つなる自由を得せしめ、彼等をして何等外部の不当なる抑圧なくして其の本来の文化を長養せしむるに在る。吾等が『亜細亜人の亜細亜』と叫ぶのは、亜細亜が欧羅巴人の支配の下に在る限り、本来の亜細亜を発揮することが出来ぬからである。若し西欧民族が真に亜細亜諸国の幸福を図るの精神を抱き、且其方が亜細亜諸国の為に真に幸福であるならば、『亜細亜人の亜細亜』と云ふ標語は無意味である。たゞ今日の実状に於ては西欧民族の態度並に精神は亜細亜に取りて喜ばしきものではない。吾等は彼等の態度並に精神を改めしむることによりて、亜細亜を救済すると共に彼等其者をも救済せんと心懸けねばならぬ。」

このように初期には理想主義的なアジア主義とでもいうべき“アジアが西欧の植民地になっていることに対して、アジアを自由にするために解放しなければいけない”という主張が行われている。

そして、大川は大正の中期ごろには、しきりに革命ヨーロッパと連帯していくと主張する。革命ヨーロッパというのは、具体的にはロシア革命後のソ連邦のことである。ソ連邦は普通の国家主義者からすると、共産主義で、当時の言葉でいえば「日本の国体を侵す」危ないもののはずなのだが、むしろ大川周明はそれに好意的であり、ソ連はアジアからヨーロッパ資本主義を駆逐する上に間接的に協力する存在だというふうに位置づけている。さらに言えば、復興アジアと革命ヨーロッパというシェーマそのものの発想の中に“国内において無産者階級、労働者階級という、迫害されている階級を助けるとともに、国際的に弱い立場にある人間を助ける、この2つが連動するべきだ”という発想が、強力に秘められていたわけである。これは非常に重要な論点であり、北一輝の『日本改造法案大綱』という書物も、国際問題に関する言説は、全くこの論理によって成り立っていた。大正半ば

ごろにはこうした一部の人々の主張にすぎなかったことが、昭和10年代には、ほとんど日本中を覆う論理になっていくのである。

ここで、北一輝のほうの言説を見ておこう。

「開戦ノ積極的権利 国家ハ自己防衛ノホカニ不義ノ強力ニ抑圧サルル他ノ国家マタハ民族ノタメニ戦争ヲ開始スルノ権利ヲ有ス。（スナワチ当面ノ現実問題トシテインドノ独立オヨビ支那ノ保全ノタメニ開戦スルゴトキハ国家ノ権利ナリ）。

国家ハマタ国家自身ノ発達ノ結果他ニ不法ノ大領土ヲ独占シテ人類共存ノ天道ヲ無視スル者ニ対シテ戦争ヲ開始スルノ権利ヲ有ス。」

「英国ハ全世界ニ跨ル大富豪ニシテ露国ハ地球北半ノ大地主ナリ。散粟ノ島嶼ヲ画定線トシテ国際間ニオケル無産者ノ地位ニアル日本ハ、正義ノ名ニオイテ彼ラノ独占ヨリ奪取スル開戦ノ権利ナキカ。国内ニオケル無産階級ノ鬭争ヲ認容シツツヒトリ国際的無産者ノ戦争ヲ侵略主義ナリ軍国主義ナリト考ウル欧米社会主義者ハ根本思想ノ自己矛盾ナリ。」

「国内ノ無産階級ガ組織的結合ヲナシテ力ノ解決ヲ準備シマタハ流血ニ訴エテ不正義ナル現状ヲ打破スルコトガ彼ラニ主張セラルルナラバ、国際的無産者タル日本ガ力ノ組織的結合タル陸海軍ヲ充実シ、サラニ戦争開始ニ訴エテ国際的画定線ノ不正義ヲ匡スコトマタ無条件ニ是認セラルベシ。」

この時期のアジア主義は、このような国内的無産者に対する連帯と、国際的無産者に対する連帯がイコールだという論理を開発したのだった。彼らは社会主義思想の変則的派生物といえるかもしれない。これが1930年代になるともう少しわかりやすい言葉で「持たざる国と持てる国」という論理で広範囲に広がっていくことになるわけである。

次に日米関係の中からアジア主義が強化されていくという点で、アメリカで大正13年に排日移民法が成立したときに、大川周明が書いたものを見ておきたい。

「いま東洋と西洋とは、夫々の路を行き尽くした、然り、相離れては両ながら存続し難き点まで進み尽くした。世界史は、両者が相結ばねばならぬことを明示して居る。さり乍ら此の結合は、恐らく平和の間に行はれることはあるまい。『天国は常に剣影裡に在る』。東西両強国が、生命を賭しての戦が、恐らく従来も然りし如く、新世界出現のために避け難き運命である。この論理は、果然米国の日本に対する挑戦として現はれた。亜細亜に於ける最強国は日本である、欧羅巴を代表する最強国は米国である。この両国は、天意か偶然か、一は太陽を以て、他は衆星を以て、夫々国家の象徴として居るが故にその対立は、宛も白昼と暗夜との対立を意味するが如く見える。」

「この両国は、希臘と波斯、羅馬とカルタゴが戦はねばならなかった如く、相戦はねばならぬ運命に在る。日本よ！1年の後か、10年の後か、又は30年の後か、そは唯だ天のみ知る。いつ何時、天は汝を喚んで、戦を命ずるかも知れぬ。寸時も油断なく用意せよ！」

このように（実際の日米戦争・太平洋戦争直前のときにはあまり賛成ではなかったのだが）排日移民法が大正13年に成立した時には、東西対抗文明史観が応用され、日米が必ずや戦うという論理が展開されていたのである。徳富蘇峰などもこの時に、反米親アジア主義的宣言をしていることからみてもこの論点は重要といえよう。

さらに重要なことは、満蒙独立運動とかかわりを持つ中で、日本と満蒙との経済圏構想を大正末期ごろに構想していったということであろう。のちに五・一五事件で逮捕された時に、大正末期の自分の考えを回想して次のように述べている。

「私の研究と私の調査とは、私に次の信念を抱かせました。それは世界史の進行において大国時代將に去らんとし代って超大国時代が来たらんとするということである。今後世界において言葉の充分なる意味で独立国として立つて行くためには少なくとも自給し自足し得るだけの経済領域を確保しなければならぬ。独立国としての政治単位は自給自足の一大経済単位でなければならぬ。すなわち大英帝国、北米合衆国、ソヴェート連邦、中華民国等のごとき国家のみが将来の国際舞台に独立国として存続する可能性がある。フランスがその実現の至難なる事を熟知していながらヨーロッパ連盟を唱えるのは何のためか。他なし彼の小さい大陸に幾多の小国が分立しては何はともあれ経済的に先ず米、英、露等の大経済単位に対抗ができず、したがって国運の進展を望み難き故にヨーロッパ諸国を一個の経済単位に組織して他の大経済単位と角逐せんためである。しかるに日本の状態を見ればその政治的版図の狭小にして資源の貧弱なる食料品、被服材料、建築材料のごとき第一次生活必需品さえも国外よりの供給に待たねばならぬ。しかも我々を囲む国々はソヴェート連邦中華民国と北米合衆国である。

この三国は、先ず第一に超大国としての可能性を具備する巨大なる経済単位である。第二にはそのいずれもが国際間の横紙破りである。しかして第三には、そのいずれもが日本に好意を有せず、支那のごときは熾烈無謀なる敵意を明示して憚るところなく、米国もまた我国をもって近き将来における唯一の仮想敵国とし、露国に至ってはその共産主義をもって我国体に挑戦しているのであります。

かくのごとき事情の下に在りて、我国が消極的には単に将来の独立を確保する上からも、

更に進んでは積極的国民的使命を実現する上からも、日本は何をさておき、少なくとも自給自足し得るだけの経済単位を政治的に支配する必要がある。しかしてその発展の方向は実に満蒙のほかにはない。日本は、満蒙を取り入れた大経済圏単位においてその経済組織を革新しなければならぬ。私は大正末期において堅くかく信じたのであります。」

こうして、結局大正の始めごろにはないまぜではあれ、理想主義的なアジア主義の方向が強かったものが、大体大正の末期ごろには日満蒙経済圏構想的な発想が強くなっていき、満蒙問題の解決策に困っていた軍部中堅と結びついていくことになったわけである。

以上、大川においてはアジア主義の理想主義的側面と日本の権益擁護的側面がないまぜになっていたこと。社会主義の平等思想が国際問題に変則的に応用されていたこと。アメリカの排日移民法の成立と満蒙問題の深刻化が急速にワシントン体制の打破と日本の権益擁護の方向をとらせたことなどが思想的特質として指摘されるであろう。

最後に昭和十年代における大川のアジア地域研究機関の設立と地域研究者養成活動について言及しておこう。

そもそも明治41年（1908年）設立の満鉄東亜経済調査局に大川周明が正式入社したのが大正8年9月、編輯課長となったのが同年11月で、大正12年には調査課長となっている。これが昭和4年に満鉄から離れて財団法人東亜経済局となるが、この時大川は理事長であった。

大川が顧問に就任後の昭和14年に調査局は再び満鉄の系列下に入る。そしてその後も主要な幹部は彼の指導下にあった。昭和14年8月、坂本徳松を編集責任者とする月刊『新亜細亜』が発刊。これは大川の発案によるもので、大川は「創刊の辞」を書いている。編集責任者坂本は戦後どのような経歴を辿ったであろうか。坂本は昭和29年日本ベトナム協会を設立、30年ニューデリーのアジア諸国人民会議に出席、31年愛知大教授となっている。そしてアジア・アフリカ諸国人民連帯日本委員会理事長となり、ガンジー、ホー・チ・ミン、ネルーの評伝を執筆した。戦後の一時期のジャーナリズムにおける現代アジア研究の第一人者的存在だったのである。そのアジア研究の基盤は東亜経済調査局時代に確立したとみてもよいだろう。

一方調査局は、昭和15年にオランダの東洋学者ベルンハルト・モーリツ（Bernhard Moritz 1951-1939年）とガブリエル・セララン（Gabriel Serrand 1864-1935年）の旧蔵書2500冊をオランダ・ライデンのブリル書店から「回教文献コレクション」として15万円で購入した。この世界的遺産は大川が購入にあたりモーリツ文献と名付けたのだった。またイ

スラム研究本格化のため台北帝大助手であった前嶋信次もこの時東亜経済調査局に招かれている。前嶋信次は次のように回想している。

「昭和十五年に東京に帰ってきたときにはアラビア語も少しは読めるようになっていたが、ちょうどそのとき、満鉄東亜経済調査局から、入局してイスラム世界の研究をしてはどうかという話があったんです。実は調査局がオランダの本屋からイスラム関係の文献数千冊を十五万円で買ったばかりで、これを研究してほしいということなのです。台湾でもらっている月給よりも高い月給を払う、仕事はイスラム関係の研究をするだけでよい、ということだった。顧問の大川周明氏にも会って採用がきまり、その後、終戦までそこでイスラム世界の研究を続けることになったのです。アラビア語の勉強のためにアラブ人を一人雇ってくれまして、四年間余りそのひとから習いました。終戦になって東亜経済調査局は消滅し、イスラム関係の文献はアメリカに没収され、現在はワシントンの国会図書館にあるよし、アメリカに行ったとき、その一部と再会してきました。」

前嶋はこの調査局で、日本でははじめてのアラビア語の基本資料に依拠したイスラム研究を開始したのだった。その後、昭和26年に慶応大学講師となり、31年教授。『アラビア史』『アラビアの医術』『世界の歴史・イスラム世界』『生活の世界史——イスラムの蔭に』『東西文化交流の諸相』『イスラムの時代』などの多くの学術書・啓蒙書を著し、わが国イスラム学の第一人者として長く活躍した。イブン・バットゥータの『三大陸周遊記』のほかに、初のアラビア語原典からの『アラビアン・ナイト』（岩波文庫、昭和41年から）の邦訳に挑んでいたが未刊のまま昭和58年死去している。

さらに昭和13年（1938年）、東亜経済調査局付属研究所が東京に設立された。大川が所長で、南アジア地域の専門家を養成することが目的であった。語学の授業に力が入れていたのだが、ここでアラビア語を担当したのが昭和12年に慶応大学を卒業したばかりの井筒俊彦であった。井筒はモーリツ文庫を閲覧するためにしばしば満鉄東亜経済調査局を訪れることとなる。

井筒は『アラビア語思想史』（昭和16年）を刊行するなどして、昭和22年から慶応大教授。言語学の研究を経て、イスラム神秘主義の研究に向かった。『イスラーム哲学の原像』（昭55年）、『イスラーム文化』（昭57年）、『コーランを読む』（昭58年）などの秀れた成果は今日、著作集（中央公論社）に収められている。大川の果たせなかった、アラビア語原典からの『コーラン』の全訳（岩波書店）も彼の手によって完成したのだった。

このようにみても大川が、日本のアジア地域研究とりわけ南アジア・イスラム地域研究の成立・発展に果たした基礎的な役割は認めざるをえないであろう。もとよりそれは大川の果たしたマイナスの側面を忘れてよいということではないが。

参考文献

- 『大川周明全集』全7巻、岩崎書店、1964－1974年
橋川文三編『近代日本思想大系、21、大川周明集』筑摩書店、1975年
大塚健洋『大川周明と近代日本』木鐸社、1990年
大塚健洋『大川周明』中央公論社、1995年
樽井藤吉『覆刻大東合邦論』長陵書林、1975年
『岡倉天心全集』全9巻、平凡社、1979－1981年
『北一輝著作集』全3巻、みすず書房、1984年
中谷武世『昭和動乱期の回想』全2冊、泰流社、1989年
前嶋信次「未知のイスラム文化を探る」『講義のあとで——碩学30人が語る学問の世界』
日本リクルートセンター出版部、1980年
『現代史資料、4、国家主義運動1』みすず書房、1963年
竹内好編『現代日本思想体系、9、アジア主義』筑摩書房、1963年
橋川文三『昭和ナショナリズムの諸相』名古屋大学出版会、1994年
原覺天『現代アジア研究成立史論』勁草書房、1984年
河村光郎『戦前日本のイスラム・中東研究小史』『日本中東学会年報No.2』1987年
平石直昭『近代日本の『アジア主義』』溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮崎博史編
『アジアから考える・5・近代化像』東京大学出版会、1984年
古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』京都大学人文科学研究所、1994年
杉田英明『日本人の中東発見』東京大学出版会、1995年

